

549 急性心筋梗塞血栓溶解療法後の運動負荷 Tl-201心筋SPECT

名村宏之、加納康至、山城荒平、北川泰生、渡辺直也、栗本泰行、山田重信(淀川キリスト教病院 循環器科)

急性心筋梗塞38例に対して血栓溶解療法を施行した19例(CT)としなかった19例(NCT)に同一 protocol の心臓リハビリ後、症候限界運動負荷心筋SPECTを(Ex-Tl)行った。短軸像でTlのuptake最小部位の±15度を梗塞中心領域(center), その両側30度を周辺領域(peri)とした。

center, periともTlのuptakeはCT群で大であった。CT群は NCT 群に比しcenterにおいて再分布の頻度が小であり/ 3 例(16%) vs 6 例(32%)、逆再分布の頻度は大であった。/3 例(16%)vs 1 例(5%)

EX-Tl はCT後のsalvaged/jeopardized myocardium の評価に有用であることが示唆された。

550 急性心筋梗塞再灌流療法後の局所壁運動改善率と安静時²⁰¹Tl心筋シンチの検討

山内靖隆、大鈴文孝、林 克己、高山英一、永井知雄
山岸 正、田原敬典、中村治雄(防衛医大第1内科)
新井真二、小須田 茂、草野正一(同放射線科)

対象は急性心筋梗塞で再灌流療法を施行した9例(発症から再灌流まで6.9±4.0時間)。発症後3±1.7週に安静時Tl心筋シンチを施行し、SPECT短軸像でのTlの取り込みをスコア化、3断面24segmentsで合計し、静注直後と4時間後での増加率を求めた。急性心筋梗塞急性期と慢性期に左室造影を施行し、Center line法により壁運動低下領域(Nom of code <3SD)を求め、局所壁運動の改善率を壁運動低下領域の縮小率で求めた。静注直後と4時間後でのTl取り込みスコアの増加率と局所壁運動の改善率は有意な相関を示し($r=0.73, p=0.026$)、梗塞領域での血流増加が局所壁運動の改善に関連している可能性が示唆された。

551 ²⁰¹TlCl・^{99m}Tc-PYP dual SPECTにて右室梗塞と診断された症例の臨床的検討

石黒淳司、岡部正明、石田 均(立川病院循内)
桑野浩彦、木村元政、酒井邦夫(新大放科)

急性下壁心筋梗塞で右室にPYPの集積を認めた症例の臨床的特徴を検討した。平成1年~4年にSPECTを施行した下壁心筋梗塞患者19例の内、右室にPYPの集積を認めたgroup1: 8例、集積を認めなかったgroup2: 11例。各群に対し、入院時所見・急性期治療法・合併症・冠動脈所見を比較検討した。発症から入院までの時間はgroup1に長い傾向があった。急性期再灌流を行った症例は、group1 2/8(25%)・group2 9/11(82%)であった。責任冠動脈はgroup1はseg1・seg2病変のみで、shock が4 例認められた。右室にPYP集積を認めた症例は入院までの期間が長く、再灌流を行わない症例が多く、半数でshockを起こしていた。

552 急性心筋梗塞症に対するLate-Reperfusionの効果; 201-Tl心筋シンチグラムを用いた検討。

江頭省吾、芦原俊昭、安藤洋志、満岡渉、今村義浩、真崎浩行、竹本真生、大塚知明、福山尚哉(松山日赤循)

タリウム心筋シンチグラム(Tl)を用い急性心筋梗塞におけるLate-Reperfusion(LR)の効果を検討した。心筋梗塞急性期に再疎通療法を受けずかつ慢性期 CAGにて責任冠動脈が開存していた22例を対象とし(LR群)、閉塞していた19例(C群)と比較し、LRの効果は慢性期(平均40日)及び遠隔期(平均59ヶ月)で検討した。慢性期では、両群ともTl上Extent Score(ES)、Severity Score(SS)に差はなく(ES:LR群;54±17%,C群;53±19%,NS、SS:LR群;107±60,C群;95±56,NS)、遠隔期でも両群間に差はなかった(ES:LR群43±19%,C群44±20%,NS、SS:LR群77±54,C群66±48,NS)。遠隔期では梗塞巣は両群とも縮小したが、慢性期、遠隔期ともTl上LRの効果は認められなかった。

553 LITA-LADバイパス術後のTl負荷心筋SPECT

星崎 洋、岡本栄一、神山 宏、外山卓二、内藤滋人、野上昭彦、大島 茂、湯浅和男、谷口興一

(群馬県立循環器病センター循環器内科)

大林民幸、金子達夫(同心臓血管外科)

LITA-LADバイパス術後約1ヶ月でTl負荷心筋SPECTを施行した70例を、RDを認めた12例(I)と認めなかった58例(II)に別けて検討。術前の臨床所見ではIで前壁の陳旧性心筋梗塞が多く壁運動異常が高度な傾向を認めた。術後の心筋SPECTでは、Iで心電図変化が多く出現した。Iの12例の内、10例では術後造影でLITAに有意狭窄はなく疑陽性だったが、follow-up 出来た症例では疑陽性所見は消失した。LITA-LADバイパス術後早期ではTl負荷心筋SPECTで疑陽性所見が出現することがあり、冠微小循環障害の遅延ならびにLITAの血流不足が関与すると考えられたが、経過と共に消失した。

554 バイパス術後のTl-201運動負荷心筋シンチグラフィーの再分布の意義: 開存グラフトを対象として

市川 聡裕、滝 淳一、中嶋憲一、利波紀久、久田欣一(金大 核)、分校久志(医療情報)、川筋 道雄(同一外)

近年動脈グラフトのflow reserveが静脈グラフトのそれに比べ小さなことが報告されている。今回、バイパス術後の開存が確認されたグラフトの各領域における術後1月での運動負荷心筋シンチグラフィーの再分布所見を検討した。冠動脈バイパス術を行なった101名を対象とした。グラフトの種類と領域ごとに開存性とTlの再分布の有無を検討した。開存静脈グラフトでは100本中8本の領域に再分布を示した。一方開存動脈グラフト94本中27本の領域に再分布を認め、これは静脈グラフトに比べ有意に高率であった。以上より動脈グラフトの一部においてflow reserveの低下があると考えられる。従って術後の再分布所見を見た場合、即バイパス閉塞に結び付けてはいけなと考えられた。